



## 巻頭言 ー哀悼のことばー

去る11月10日早朝に、父であり、本法人の理事長であります松端利昌が、92歳で永眠いたしました。誠に勝手ながら、葬儀は11月12日に親族のみにて執り行いました。お知らせが遅れましたこと、ご容赦願いますとともに、故人が生前中賜りましたご厚誼に深く感謝申し上げます。

父が亡くなるほんの数日前のことでした。夜中の2時ごろ、『おお〜い』と呼ばれたので、枕元に行ってみると、『起こしてくれるか。ちょっと、出かけよか』と言うので、「まだ夜中やで。もう少し寝とかないと…」と答えました。

でも、『そうか。それでもいいから出かけよか。起こしてくれ』と繰り返します。「まだ夜中やで。どこに行くの?」と尋ねました。すると『出かけよかって言ってるのに、どうして準備してくれへんのか』と少し呆れたような口調で、さらに『ここには、いま、わしとおまえしかおらんやろ。わしとおまえが同意して、出かけることにしたら、すぐに出られるやないか』と、あまりに理路整然と言うので、根負けしてしまい、私は「そやな」と答えて、家のなかを車椅子でゆっくりと、ほんの数分程度ですが一緒に歩きました。

寝室に戻り、ベッドの横に車椅子をつけると『ありがと、ありがと!!』と2回言って、『そろそろ寝よか』とニコッと笑ってくれました。それは“満面の笑み”とはこんな表情なんだと思うほどの素敵な笑顔で、なんだか胸の奥が温かくなりました。そして、父も朝までぐっすり眠ってくれました。

父の口癖は、『わしは1年365日、1日も休まずにこの仕事してるんだ』でした。とはいえ、そんな父も幾度となく、病氣や怪我に見舞われ、入院することもしばしばありました。それでも入院中も、退院してからも、驚かされるほどの気力で、病氣や怪我を克服してきました。

父は1958(昭和33)年9月に、神戸市では最初の知的障害児施設「おかば学園」を母や祖母らと共に設立しました。この名称は、地名をとってつけられたものです。いまでこそ拓けていますが、当時は神戸市といえども六甲山の裏側で道も十分に整備されておらず、上下水道やガスも通っていないような所を、まさに自ら草刈りや整地をするなど“開拓”して、施設を建てたのです。「おかば学園園歌」では、「みんなのおかば学園は、いつもたのしい我が家です」と唄われています。その当時の福祉施設は、不十分な法制度のもとで、職員と子どもたちが「我が家」である施設において、寝食を共にすることで、なんとか生活が維持されるような状況だったのです。



その後、今日までの間に法制度も充実し、そのもとで当法人としても各種の施設や事業所を整備してきました。

おかば学園が設立され、今年の9月から65年目に入りました。このところ節目での式典や記念誌の発行などができていなかっただけに、父と共にそうした行事ができればいろいろな考えたところなので残念でなりません。

私が大学の教員になりたてのころ、『教えるだけじゃなくて、“自分なりの哲学”をもたないと、立派な教授にはなれへんな…』と言うので、「そんな簡単に“自分なりの哲学”なんか、もてるわけないやん」と笑いながら言い返したことを、昨日のこのように思い出します。父の場合、哲学というほど崇高なものではないのかもしれませんが、それでも「こんなとき、父(理事長)ならきっとこう言うやろな」というような、ある種の思考のパターンがあったように思います。また、独断専行のところも多く、誤解されやすいところもあったのですが、しかしそれでも、そうした言動は決して私利私欲のためではなく、常に自分以外のだれかのための行動だったように思います。そうした父の影響を受けながら、いつの間にか私も“自分なりの哲学”を磨こうと努めてきたように思います。

そんな父であり、理事長を失ってしまいました。床に伏した父の傍らで、改めて「ケア」について考えるようにもなりました。ケアとはただその人といま一緒に過ごせることを大切に思い、お互いに存在を肯定し合うこと。目や指先の動きや体調の変化など、些細なサインにも気を配り、コミュニケーションを交わし続けること。そして心温まるエピソードを紡いでいくこと…。あの晩も、そんなことを考えていました。「調子どう…?」『そやな、身体が思うように動かんや…』。もうそんな会話もできなくなってしまいました。

どうかゆっくり休んでください。

KCDラボ代表 松端克文

## シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋 今月のテーマ：社会関係資本 (social capital)

### ◆「社会関係資本」という概念

社会関係資本の概念は、パットナム,Rによれば、「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼・規範・ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」とされており、それは信頼 (trust)、ネットワーク (networks)、規範 (norms) により構成されている (パットナム (1993)『哲学する民衆主義』)。その後、パットナムはソーシャル・キャピタルを「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」ともしている (パットナム (2000)『孤独なボウリング』)。ここでは「信頼 (trust)」が「信頼性 (trustworthiness)」に置き換わり、それは社会的ネットワークと互酬性の規範から生まれ、そうした社会関係資本の結果として「信頼」はもたらされるという図式になっている (稲葉陽二編 (2021)『ソーシャル・キャピタルからみた人間関係』)。「信頼」についても、それが社会全般に対する信頼 (「一般的信頼」、もしくは「普遍化信頼」と特定の個人に対する信頼 (「特定化信頼」) に分けることができる (稲葉 2021)。また、「個人資産としての学歴、技能や逆に社会一般にいきわたる国民文化、社会規範ではなく、その中間領域で、特定のコミュニティのメンバー間でのみ共有され、彼らのつながり力を規定する同一尺度の信頼に裏打ちされた『コミュニティ・キャピタル』、つまり、同じコミュニティの成員間でのみ活用される関係資本」に着目する立場もある (西口・辻田 (2017)『コミュニティ・キャピタル論』)。

また、社会関係資本は確かに個人にとっての意味という観点からの分析もできるが、単なる「人的資本」とは異なり、人と人との関係のあり方にかかわる概念である。それだけに「複数の個人からなるコミュニティが存在しなければ社会関係資本は成立しない」(稲葉 2011)といえるので、「コミュニティこそが社会関係資本の苗木を形成している」ともいえる (稲葉 (2001)『ソーシャル・キャピタル入門』)。コミュニティレベルの社会関係資本は、国から都道府県、市町村、中学校区、小学校区、自治会・町内会、隣近所などの居住している地域から広がる地理的な範囲に、あるいは職場や同窓会、スポーツや趣味のサークル、NPO などさまざまなレベルや形態が存在している。

### ◆「結束型」と「橋渡し型」

さて、社会関係資本をコミュニティや社会的な結びつきの特性を社会関係資本で分類する場合には、「結束型」(あるいは「排他型」)と「橋渡し型」(あるいは「包含型」)の区別を用いることができる。「結束型の社会関係資本」は、内向きの指向をもち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化する傾向にあり、特定の互酬性を安定させ、連帯を動かしていくのに都合がよい。

対照的に「橋渡し型の社会関係資本」は、外向きで、さまざまな社会的亀裂をまたいで人々を包含するネットワークでもあり、外部資源との連繋や情報伝播において優れている。結束型の社会関係資本が、社会学的な「強力接着剤」で、困ったときの貸し借りや病気の見舞いなど「なんとかやり過

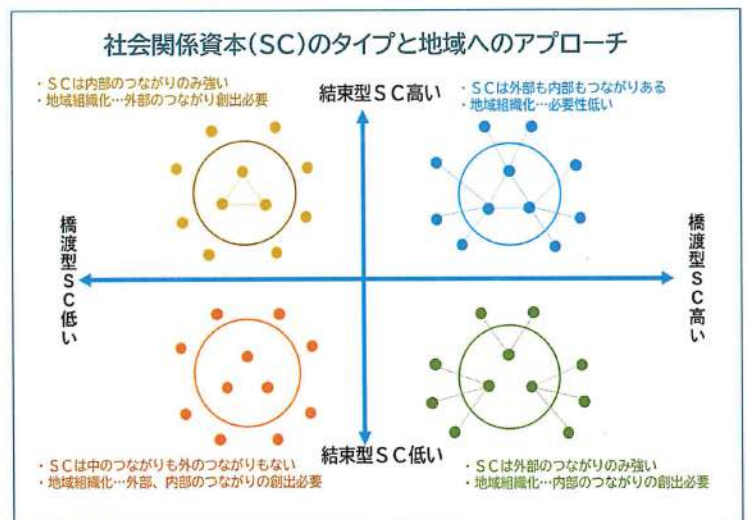
す (getting by)」に適しているのに対して、橋渡し型の社会関係資本は、社会学的な「潤滑剤」であり、新たな情報を得たり、雇用の口利きをしてもらったりするなど「積極的に前へと進む (getting ahead)」のに適しているとされている (パットナム 2000)。表にまとめると次のようになる。

社会関係資本の2つのタイプ

	結束型	橋渡し型
関係	濃密	ゆるやか
ベクトル	内向き	外向き
性質	同質性	多様性
特徴	情緒的	言語的

### ◆社会関係資本 (SC) をふまえた地域へのアプローチ

次にこうした2つの社会関係資本 (SC) をそれぞれ高い～低いという象限に分けてみると、次のような4つに分類することができる (稲葉編 2021)。



まず、結束型 SC が高く、橋渡し型 SC が低い場合 (左上の象限) では、地理的的近接性があり、対面での接触頻度が多く、それだけに流動性が低い安定したメンバー間での親密な関係 (親密圏) が形成されやすく、「強い紐帯」のもとにあるといえる。それだけに地域内に閉じられている関係を外部へと開き (拓き)、外部との新たな関係を創出していくようなアプローチが必要となる (「集団の外部へと関係を拓く (ネットワーク形成) アプローチ」)。

次に結束型 SC が低く、橋渡し型 SC が高い場合 (右下の象限) では、外へとつながる関係は維持しながらも地域内でのメンバー間のつながりを強化していくようなアプローチが必要となる (「内部の結束を強める (集団形成) アプローチ」)。すなわち、こうした状況にある地域に必要なアプローチとしては、そこに居住する住民同士の出会いの場・機会をつくり、地域内の結束を強めるためのはたらきかけが必要であると考えられる。

左下の象限の場合は、結束型 SC も、橋渡し型 SC も低い状況なので、上記の2つのアプローチを組み合わせた対応が求められることになる。このように地域の「つながり」を社会関係資本で捉え直すことで、そこへのアプローチのあり方がより明確になるのである。 KCD ラボ代表 松端克文 (武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授)

\* 毎号ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

## ～法人医療連携室①～

今号から2回に分けて、2021年4月に法人内に設置された「医療連携室」について紹介します。場所は本館2階の児童発達支援センター前で、室長は横田治郎氏、スタッフは秋吉節子氏、大島由香利氏です。

今年度、設置2年目となる医療連携室について、統括施設長に設置の経緯について伺いました。

### ――なぜ、「医療連携室」を設置されたのでしょうか。

当法人はこれまで、障害福祉や保育などの福祉サービス事業を展開してきましたが、そのなかでずっと「医療・教育・福祉」の連携が必要であると考えていました。今日まで、すでにいろいろなところが連携に向けて取り組みを実施されていますが、具体的で効果的な連携はむずかしいのが実状であると思います。

地域の障害がある方の、障害区分認定にかかる医師の意見書の依頼や、歯科受診のむずかしさについて話を伺う機会があり、医療との連携の必要性をさらに強く感じるようになりました。ですから、どうしても当法人のあるエリアで「具体的な連携」を構成していきたいと思いました。

当法人は、ご利用者の高齢化に伴い、単体の病院との嘱託契約だけでは間に合わない現状を抱えています。嘱託医の病院との連携も含めて、より近隣の地域医療との連携（ケアシステム）も必須で、その構築は急務であると思っています。一昨年、「北区医師会」、「北区医療介護サポートセンター」にかかわる横田氏から、新たにつくられる「箕谷会館」の話の伺い、法人内に医療連携室を設置することにしました。

高齢者福祉分野ですでに実践されている「地域包括支援」を、障害福祉分野でも実践していきたいという思いもありますので、医療連携室によってその実践を進めていければと考えています。



医療連携室一本館の2階、連カン室のとなりにあります

続いて、医療連携室の横田室長に、設置についての思いやこれまでの取り組みなどについてお話を伺いました。

### ――統括施設長からの「医療連携室」設置の話はどのように思われましたか。

統括施設長とは、以前（神戸市障害福祉課の職員時代）からいろいろな話をしていましたが、医療連携室のことは、2021年4月から北区の医療介護サポートセンターが、新設

される箕谷会館に集約・移転されることになった話のなかで伺いました。「医療・教育・福祉」の連携が課題であると考えているということの伺い、ちょうど北区医師会のほうからも連携の話があがっていたこともあり、「法人医療連携室」で自分ができることがあるかもしれないと思いました。

「福祉」だけでは障害のある方々の生活を守ることはできません。「医療」とのつながりは必要不可欠だと思います。私はこれまでずっと医療とのかかわりがあったので、変わりなくこれまでの経験やネットワークを生かして動くようにと、統括施設長から言われています。



箕谷会館1階が北部休日診療所、2階には医療介護サポートセンター、北区医師会等の事務所があります(マルハチ箕谷店の向かい)

### ――これまでの取り組みを教えてください。

医療連携室設置のときがコロナ禍で、ワクチン接種が始まったばかりでしたので、陽気会のご利用者のワクチン接種について考えました。

障害のある方については、優先的に接種が可能と言われてはいましたが、病院での全員の接種は困難であると思いました。まず協力医療機関である真星病院へ施設内での集団の接種を依頼しながら、同意書を準備してご家族等へ送り、同意を得た方について、接種日の割り振りを行いました。

みのたに園を除く法人施設では、病院の休診日である日曜日に複数回、医師と看護師に来ていただき、法人内でワクチン接種を実施していただきました。みのたに園には、ご利用者が登園されている水、木曜日など平日に医師に出向いていただきました。

同じ時期に、北区医師会でつながりのある、近隣の小児科さだひろこどもクリニックの貞弘院長より、クリニックでのご利用者のワクチン接種について、ご協力のお声がけをいただきました。限られた日程のなかで、すべてのご利用者の接種はむずかしいと考えていたため、貞弘院長からのお申し出を受け、接種をお願いすることにしました。現在も、ずっと継続していただいています。ご利用者だけではなく、法人の職員に対しても同様に対応していただき感謝しています。

### ――そうですね、本当に助かりました。

コロナ禍でワクチン接種から始まった医療連携室の動きですが、続きは次号にて。

(編集委員会)

## 活動報告

### ～2022 年度 第 1 回法人事業報告会～

去る 10 月 12 日、20 日、25 日に、法人として初めてとなる「事業報告会」を実施しました。

各施設/事業所の 1 年間の取り組みについてそれぞれ報告し、特に秀逸な取り組みに対して表彰を行うというのが事業報告会の趣旨ですが、今回は『全事業所等の取り組みを紹介・報告することで、それぞれの機能を明確にすることと、事業所等の枠を超えて交流を図ること』を目的として、第 1 部は表彰式、第 2 部は交流会という流れで行いました。

3 日間の、のべ参加者数は 189 名でした。



<表彰状授与 よろこび荘>

第 1 部の表彰式は、全事業所等を表彰するというので、3 日間に分けて 18 の事業所/施設/部署等が表彰され、表彰状と共に、報奨金の目録が手渡されました。

表彰名やその理由については、各管理者等が考えたものが記載されました(下記一覧表参照)。

あわせて、2021 年から技能実習生としてベトナムより来られ、よろこび荘とひだまり園にて勤務されている技能実習生 4 名も表彰されました。日本語を学びながら、日々ご利用者を支援されている技能実習生たちは、表彰後に流ちょうな日本語であいさつをされていました。

#### <表彰名>

おかぼ学園	閉結しクラスターを乗り越えたで賞
児童発達支援センター おかぼ学園	安全安心な環境整備に努めたで賞
放課後等「作」ビス おかぼ学園	子どもも保護者も笑顔にしたで賞
ほっとランド	毎日明るく楽しく支援をしたで賞
有野ひだまり保育園	いつも笑顔で保育をしたで賞
ようき寮	一生涯イベントを企画したで賞
よろこび荘	毎日快適で安全な支援をしたで賞
ひだまり園	身体機能の維持向上に努めたで賞
ハートフルホーム	新設事業を見事気遣いに乗せたで賞
給食課	多くの方々へ喜びを提供したで賞
事務課	率先し業務の効率化に努めたで賞
グループホーム	毎日おいしいご飯を提供したで賞
サニーサイド神戸	新しい作業の開拓に挑戦したで賞
みのたに園	いろいろな日中活動に取り組んだで賞
しごとサポート北部	相談者に寄り添う支援をしたで賞
隔気会相談支援事業所	十年間少欲精進でがんばったで賞
サニーサイド宮崎	毎日にわたりの世話を続けたで賞
技能実習生	優秀賞



<ベトナム人技能実習生>



<宮崎県小林市にあるサニーサイド宮崎はオンラインで>

第 2 部は、各事業所等の紹介動画を視聴しながらの交流会です。お弁当をいただきつつ、動画を視聴しました。

企画の段階では、「各事業所等の紹介動画は 4 分程度で制作を一」と依頼されていたのですが、動画制作が得意な職員が多かったのか、完成すると全体で 80 分の長編大作 (!) になってしまいました。しかしそのクオリティは高く、大変見ごたえのあるものに仕上がっていました。

職員の方々からは、「ほかの施設や事業所の業務内容などがわかってよかった」とか、「見ていて、おもしろかった」「利用者さんの笑顔がすばらしかった」など好評でした。



<交流会の様子>

第 1 回目ということもあり、反省点や改善点などはたくさんありました。コロナ禍であるために、食事形態も制限をせざるを得ない状況で、交流も思うようにはできませんでした。しかし 1 回平均 63 名の職員が集い、同じ時間・情報を共有できたことは有意義であったと思います。

計画に基づいて支援を行い、その 1 年間の取り組みを発表できる機会となるよう、次回の実施へ向けて検討を重ね、楽しい事業報告会を作り上げていけたらと思います。ご参加いただいた職員の皆さま、ご協力いただいた職員の皆さまありがとうございました。お疲れさまでした。(編集委員会)

## シリーズ 施設長インタビュー① ～障害児入所施設 おかば学園～

今号より、2020年度以降に新たに施設長に就任された方々を紹介いたします。最初は、2021年度から障害児入所施設おかば学園の園長となられた安田和晃氏です。

### ——現在の入所状況について教えてください。

定員は20名で、現在員は21名です。内訳は契約入所が8名、措置入所が13名。年齢層は、未就学児の6歳1名、小学生が5名、中学生が6名、高校生が9名で全員男児です。

学園はユニットになっていて、AグループとBグループに分かれて生活しています。Aグループには6歳～16歳の児童が、Bグループには行動障害のある児童や中高生がそれぞれいます。年齢を中心にグループ分けをしていますが、子どもたちの相性や障害特性に合わせて編成をしているので、明確に年齢だけで分けているわけではありません。

A・Bグループのほかに、将来、自立を目指している7名の子どもたちについては、小規模グループケア（別フロア）で生活しています。



### ——強度行動障害支援を実践されているということですが、いつから取り組んでおられるのでしょうか？

現在は県の事業となっている、北摂杉の子会の堀内氏による「強度行動障害支援者養成講座」を2020年度より受講し、自分自身が支援に取り組みました。基礎講義を受講後、ひとりのご利用者の事例をもとに検討会に毎月参加し、助言をいただいで現場で支援方法を再検討し、スケジュールボードを作ったり、空間の構造化を図ったり…。2年間、いろいろ考えながら取り組んだ結果、問題となっていた行動も激減し、支援の成果を実感しました。現在はほかの職員が実践を引き継いで、ご本人用のコミュニケーションボードを活用して、スムーズな意思表出につなげています。

支援をしていくなかで、学校などを含む関係機関や、全職員の統一した支援を行うことが課題でしたが、支援の根拠を理解してもらい、一緒に対応策を考えていくことで、連携した支援ができあがっていったと感じています。現場職員が意欲的に取り組んでくれているので、次年度はほかのご利用者に対しても、支援方法を取り入れていけたらと考えています。

### ——成果を実感できると、支援をしていて嬉しくなりますね。ところで学園ではさまざまなイベントがあるようですが、

コロナ禍でいろいろな制限がありますが、子どもたちに少

しでも喜んでもらえるようにと考えられています。行事担当の職員を中心に、いろいろな企画を出してもらっています。

昨年度はキッチンカーを呼んでたこ焼きをみんなで食べたり、今年の夏にはキャンプに出かけて、川遊びを楽しんだりしました。自然のなかで、子どもたちがのびのびと遊ぶことができてよかったと思っています。

今週末には、三田市の駒ヶ谷体育館アリーナを貸し切って親子運動会を実施する予定です。コロナ禍で実施を見合わせてきた行事ですが、約3年ぶりとなる保護者を交えての行事ということもあって、現在、多数の申し込みをいただいています。元気な子どもたちの様子はもちろん、自分を含む職員のことも保護者の方々に見てもらい、わずかな時間でも一緒に交流できるよい機会になればと思っています。と言いがら少し緊張しますが（笑）。

### ——楽しい運動会になるといいですね。安田園長が感じておられる、学園の課題などはなにかありますか？

環境整備が課題だと考えています。現在、おかば学園はユニットにはなっているのですが、全室個室化はできていません。ユニット型に改装してから年数も経っているので、工事が必要な箇所もあちこちに出てきています。子どもたちの特性を考えてもやはり個室が望ましく、現在いちばんの課題だと思っています。

また静養室として整備していた居室環境が、“静養”には適さなくなってきたため、ここもあわせて工事が必要だと考えています。ほかにも職員室の狭さや物の多さなど、働く環境も含めると、なんとかしたいところはたくさんあります。

ほかの課題としては、児童発達支援管理責任者（以下、児発管）が現在いないため、自分が施設長と兼務になっているということです。業務としても大変な状況ですが、それよりも、意欲のある職員に児発管としてがんばってもらえないことを残念に思っています…。引き続き次年度も、児発管研修の申し込みを行っていきます。

### ——今後の展望をお聞かせください。

施設長になって2年目に入り、日々一生懸命がんばっているつもりですが、まだまだ「勉強しないと…」と感じることが多いのが正直なところです。支援においては、強度行動障害支援だけでなく、「発達段階チェックシート」を活用し、発達段階をふまえたアセスメントや支援計画作成など、支援に生かせるよう取り組みたいと思っています。

3年目の職員を中心に、みんなで助け合って支援している状況を非常に頼もしく、ありがたいと感じています。これからは、一人ひとりの子どもに寄り添った支援の提供ができるよう、チーム全体で進んでいきたいと思えます。

### ——お忙しいところありがとうございます。

子どもたちも職員も、いつも元気なおかば学園ですが、安田園長のもと、「チームで取り組む支援」を日々実践されています。安田園長は冷静で、現場職員と一緒に真面目にコツコツと仕事に取り組んでおられる印象でしたが、お話を伺って、それだけでない“熱い”思いも感じられました。

親子運動会の大成功をお祈りしています。（編集委員会）

## ちょっといいですか？大西ですけど…

－「人」と合わせていくこと－

### ◆事業報告会の余談

今月号の記事にあるように、陽気会では、先日事業報告会と表彰式を開催しました。法人内の各施設、各事業所の日ごとの取り組みや職員の仕事の様子が、次々とスクリーンに映し出され、感動的な時間でした。自分の施設や自分の仕事を自慢できること、誇りに思えること、堂々とPRできること…大変素晴らしいことだと思います。といっても、実際には職員の周りでは日々さまざまなことが起こっています。もちろん、いいことばかりではありません。予想外のことも頻発します。利用者の支援で悩んだり、反省したり、職員間の人間関係で悩んだり、ときにはプライベートのあれこれが仕事に影響することもあります。

それでも、福祉という業界で働く以上は、自らの感情を常にコントロールし、ときに自分を押し殺し、場合によっては作り笑顔で立ち振る舞わなければならないときもあるかと思えます。スクリーンの裏側には、そのような苦労や悩みが見え隠れしていました。そこをいかにして克服しているのかという、努力の姿が同時に映しだされていました。

それにしても、動画作成を担当した職員の技術はどれもすごかったですね。司会者（大西）のアナログチックな進行とは対照的でした。次回は、司会進行もロボットにやってもらおうかと思ったりしました。

### ◆様々な人と向き合うこと

ところで、福祉は、対人援助業務であると言われていています。いまさらですが、「人」なくして福祉は存在しません。ただ、対面する人は、利用者さまだけではありません。同僚職員や上司と、利用者さまのご家族と、ときには、業者に関係機関の職員にと、直接的な援助業務と離れたところでも、さまざまな「人」と向き合っていかなければいけません。付き合っていかなければなりません。こちら側も「人」である以上、自分を取り巻くすべての「人」とうまくやっていけるような離れ業もっている人はいません。必ず、合う・合わないが付きまといまいます。

それでも、私たち福祉職人には、「人」と合わせていくという術が求められます。自分らしさよりも、対面する相手の立場を優先しなければならないときもあります。苛立ちや怒りの感情を抑え込まなければならないときもあります。ここが、この仕事の最も大変なところなのだと思います。

事業報告会で、スクリーンに写し出された多くの風景が、いつまでも変わらずに続いていくことを願っています。（大）

## 陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、今年の9月から65年目に入りました。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

### ラボサポーター(協力会員)募集中です

施設・事業所サポーター 年間 10,000円

個人サポーター 年間 1,000円

サポーターの皆さま、いつもありがとうございます

### 陽気会の SNS

Facebook Instagram Twitter  
フォローよろしくお願いします

編集委員会：松端 克文

大西 博之・朝日 満子

大島 由香利

〒651-1313

神戸市北区有野中町 2-5-19

社会福祉法人陽気会

KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.

Tel : 078(981)7271

Fax : 078(981)0825

HP : <http://youkikai.or.jp/>

Email: [kcclab@youkikai.or.jp](mailto:kcclab@youkikai.or.jp)

